

畜産技術と関連機器製造メーカー

(社)畜産技術協会
会長 山下喜弘



今や家畜の生産や畜産技術の研究開発を進める上で器具・機械類と係わりがない分野は皆無に等しいであろう。コンピューターや各種実験機器類等の汎用性のあるものは別として機器類といっても実際にそれ自体を畜産の生産そのものに利活用する資材としてのものと畜産の各分野の研究や技術開発を進めるためのもの、つまりツール(道具)として必要な機器類がある。いずれもヨリ正確で効率的かつ簡便性や経済性が求められる。

いうまでもなく、これらは全て機器メーカーが供給するものである。最近では生産資材機器類も搾乳ロボットに象徴されるように、また、技術開発機器類もDNA解析機器のように輸入物も多い。畜産専用機器に限っても国内でもかつてのようにわが国の畜産そのものがどんどん拡大し発展していた時期には多くの機器メーカーが参入し、積極的な投資もなされ開発が進められてきた。しかし現在の畜産の状況や景気の動向から多くの企業はビジネスチャンスを求めているものの、分野によっては量産効果が期待しにくくなったり、企業の余裕がなくなり新しいものの開発意欲や投資がにぶりがちである。畜産機器専門メーカーも企業としては当然の行動であるが、その軸足を畜産から他の分野に移していくといったことも生じているのではなかろうか。

ところで筆者は、これまでにいくつかの開発途上国の畜産をかい間見る機械があったが、その殆ど全ての国では、畜産の研究開発用のツールとしての機器類はおろか、畜産現場に必要な機器類も自国調達ができ得ない国である。これは当然といえば当然で、その需要規模の問題もあるが、技術も含め製造工業等のインフラ欠除によるもので、然るが故に開発途上国となっているということでもあるが、この点はその国の畜産振興を図る上で実に大きな制約要素となっていることが分かる。

これと異なり、わが国のような先進国の場合は、何も国内で畜産関係の機器類を生産しなくとも必要なものはいくらでも海外諸国から輸入し、これを使えば足りるとの分業論的な考えもできよう。また性能や経済性に勝れた機器類の活用は、それがどこのものであれ畜産物の厳しい国際競争にさらされているわが国畜産として当然であり、また技術の研究開発に用いる機器類にしても研究開発を進める上で他に遅れを取らないよう対応していく必要がある。他方機器メーカーはメーカーで商業ベースに基づいた企業論理で割り切って行動するハズであるからそれに委ねておけばよいとの考えもある。理屈の上からは確かにそうであろう。

しかしわが国の畜産現場で用いる機器類や畜産技術の研究開発を一層進めるのに要するツールとしての機器類の多くを海外にどんどん依存し、国内のメーカーが畜産分野から撤退したり、衰退していくようなこととなればやはり畜産生産や畜産技術の研究開発活動にもマイナスに作用することが危惧される。畜産全体にとっていきなりではなくボディブローのように徐々に徐々にその影響がでてくるのではなかろうか。

いずれにせよ畜産の発展や効率性を高めていくためにはあらゆる分野でヨリ質の高い機器類の開発は不可欠である。その意味において国内の畜産関連機器メーカーが元気をつけ、国内の需要はもとより、その輸出面でもさらに活躍して貰うことを望みたい。

このためにはメーカー側の自主的・自発的、かつ積極的な努力に期待するとともに、需要側の狭義の意味におけるわれわれ畜産サイドもこれまで以上にメーカー側への働きかけを強化し、相互に協力し合い、あるいは支援しつつその振興・発展を図っていく必要があると思われる。機器メーカーの果たしている役割をもっと評価し、大事に考えたい。